



TITLE:

「特撮映画」・「SF（日本SF）」
ジャンルの成立と「核」の想像力
ー戦後日本におけるポピュラー・
カルチャー領域の形成をめぐる
ー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

森下, 達

CITATION:

森下, 達. 「特撮映画」・「SF（日本SF）」ジャンルの成立と「核」の
想像力 ー戦後日本におけるポピュラー・カルチャー領域の形成をめぐ
ってー. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19211>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は序論のみ
2016-05-18に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	森下 達
論文題目	「特撮映画」・「SF（日本SF）」ジャンルの成立と「核」の想像力 —戦後日本におけるポピュラー・カルチャー領域の形成をめぐって—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文では、「特撮映画」と「SF（日本 SF）」というふたつの「ジャンル」の形成過程を歴史的に検討することで、現在見られるような「非政治的」なものとしてのポピュラー・カルチャー領域が、戦後の日本においてどのようにして形成されていったのかを明らかにすることを試みている。ふたつの「ジャンル」のありようを考える上で手がかりとなるのが、怪獣や宇宙人、変形した人体といった「非現実的な形象」である。「非現実的な形象」は「特撮映画」ジャンルと不可分なものであるばかりか、「SF（日本 SF）」ジャンルにおけるきわめて重要なモチーフでもある上に、文学や美術といったポピュラー・カルチャーに先行して存在する領域においても、多くの作家が関心を寄せるものとしてあった。「ジャンル」を代表する作品内で「非現実的な形象」がどのように扱われているかに着目し、「ジャンル」に固有のふるまいや規範を解き明かしていくことが、本論文の採用した手法である。</p> <p>「特撮映画」や「SF（日本 SF）」においては、「非現実的な形象」を作中に登場させるにあたって、それを合理づける要素として核エネルギーが用いられることがしばしばだった。「非現実的な形象」を軸に据えて、「特撮映画」と「SF（日本 SF）」の「ジャンル」的成立と変容を検討する本論文は、戦後日本のポピュラー・カルチャーが、原水爆実験の問題や原子力平和利用などの社会的アジェンダといかに関わっていったのかを立体的に問い直すものでもある。</p> <p>序論ではまず、2011年3月11日に勃発した東日本大震災を受けて書かれた、戦後日本のポピュラー・カルチャー作品を通じて核エネルギーの問題を論じた研究について概観する。そこでは、ポピュラー・カルチャー作品を透明な媒体と見なし、直接的に社会を反映するものとして扱う傾向があった。結果、多くの研究は、現在の目で見たときの「正しさ」に基づく、作品への価値判断に陥ってしまっていた。本論文が「ジャンル」概念を導入しているのは、こうした問題に対処するためである。古典的な文学研究では「ジャンル」の存在は自明視されてきたが、近年の、映画美学やマンガ研究における「ジャンル」論は、作り手と受け手との相互作用の中で作品を経るごとに変容するものとして「ジャンル」を捉える認識を提出している。この「ジャンル」認識を援用することで、同時代の作り手や受け手の認識も踏まえつつ、社会と作品の関わりを議論の俎上に載せることができるようになる。</p>			

第一章では、「特撮映画」ジャンルの始点となった映画『ゴジラ』（1954年）が論じられる。第五福竜丸事件を受けて製作された『ゴジラ』では、同時代の社会問題を踏まえて「非現実的な形象」が造形されている。怪獣ゴジラは、水爆実験によって生息地を追い出された太古の生物と設定されているのである。ところが『ゴジラ』は、公開時、低い評価でもって迎えられた。従来は評論家の無理解を示すものとして片づけられてきた同時代評だが、そこには、1950年代半ばの時期における原水爆にまつわる議論が影を落としていたことが、本章での検討を通じて明らかになる。『ゴジラ』評は、『原爆の子』（1952年）、『ひろしま』（1953年）といった「原爆映画」評から連続するものである。原水爆を扱った映画には、「怨嗟」や「感傷」を前面化することなく「平和への悲願」という普遍的な理念を表明することが、一貫して要求されていた。逆コースや第五福竜丸事件などの出来事を経て、日本人が主体的にアメリカの責任を問い直していくことが「平和への悲願」の表明である、という認識が生まれる。三角関係のドラマが用意され、物語の上で「感傷」が前面化している上に、現実の国際情勢を問い直そうともしない『ゴジラ』は、当時においては評価されるものではなかった。

この批判を踏まえて、それ以降の「特撮映画」では、「非現実的な形象」と社会問題とが切り離されていった。第二章では、1950年代後半の「特撮映画」群を指し示す「ジャンル」名称として同時代的にはあった「空想科学映画」という語が、どのような内実を有していたのかが検討される。文芸評論家の荒正人は、科学と人間の関係を問題にし、「文明批判」を行うものとして「空想科学映画」を意味づけ、『地球防衛軍』（1957年）を高く評価した。『地球防衛軍』では、水爆戦争で母星を滅ぼしてしまった怪遊星人ミステリアンが地球移住を企むが、国境を越えて一致団結した地球人によって撃退される。荒の批評では、ミステリアンという「非現実的な形象」を通じて、科学の使い方を誤った場合の人類の未来を暗示しながら、それでも人類は科学技術を正しく扱うことができるだろうとの希望を描き出したところに、ソフィスティケートされた「空想科学映画」性が見出されていた。すなわち、個々の生命にとっての原水爆を問題にするのではなく、文明史的観点から核エネルギーを捉えてみせたところが、高い評価を受けたのである。この種の評価は、同時代に「原爆文学」に向けられた要求とも一致を見るものだった。

荒の主張は、日本社会の前近代性を批判する「近代主義的」な立場からのものだといえるだろう。ところが、これとは様相の異なる議論が、1950年代後半から姿を現しつつあった。このことが第三章の主題となる。評論家の花田清輝や、作家の安部公房の手で展開された「アヴァンギャルド的」な「特撮映画」論は、「非現実的な形象」が科学的であることを重視しないところにそのユニークさがあった。そこで重視されたのは、「非現実的な形象」を通じて日常的な価値観を破壊し、アクチュアルな主題を発見する姿勢だった。1950

年代末から1960年代初頭にかけては、武田泰淳や三島由紀夫といった文学者が、ゴジラや空飛ぶ円盤など、「特撮映画」の素材にもなる「非現実的な形象」を取り上げて作品を執筆している。そこでも、「非現実的な形象」をあえて科学から切り離すことを通じて、「第三次世界大戦前夜」状況を文学の主題とすることが企図されていた。このような発想は、「特撮映画」ジャンルの内部にも流れこんでいく。福永武彦、堀田善衛、中村真一郎の三人の純文学者が原作を担当した『モスラ』（1961年）では、南洋の孤島で原住民に崇められる守り神である怪獣モスラを通じて、われわれが暮らす近代社会を問い直すことが試みられている。その結果、反核テーマのソフィスティケート化は、『モスラ』では一層進行し、原水爆実験が批判され、ついで日本と大国とのあいだの国際軍事体制が俎上に載せられ、最終的には資本主義体制そのものが問われることになる。

これは、個々人にとっての被爆／被曝の問題が後景に退いていくことと同義でもあった。さらに、「非現実的な形象」が科学と切断されたことは、1960年代における怪獣のキャラクター化をもたらした。自立した異形異物を通して日常を相対化するという「アヴァンギャルド的」な方法論は、怪獣キャラクターを、現実から「切れた」形で存在するものとして描くことの正当化に読み替えられていった。

第四章では、「SF（日本 SF）」ジャンルの定着過程が問題にされる。既存のSF論では、SFというものが本質主義的に捉えられる傾向があるが、それを生成・変容する「ジャンル」として捉え直すところに本章の眼目がある。「SF（日本 SF）」もまた、「近代主義的」な議論と「アヴァンギャルド的」な議論の両方と関わりを持っていた。1960年代、「SF（日本 SF）」は、荒正人との論争を通じて「近代主義的」な議論を切り捨てていくとともに、「アヴァンギャルド的」な議論を自分たちの先駆として選びとるに至る。その果てに「SF（日本 SF）」は、政治的・問題提起的な態度を前面化しない「クール」なフィクションジャンルとして自身を価値づける主張を行うようになる。こうしたSF観のもと、国際情勢など作品外部の事象との関わりで作品を捉える姿勢や、それを扱う作家の主体性を問題にする姿勢は、「非SF的」なものとして「ジャンル」の内部から排除された。「非政治的」な領域として「SF（日本 SF）」ジャンルは確立された。

第五章では、「SF（日本 SF）」が「非現実的な形象」をどのように扱ったのかが主題となっている。「ジャンル」の出発点にショート・ショートがあったこともあって、「SF（日本 SF）」は特定の価値観を重視しない「相対化」の方法論を支持し、「非現実的な形象」それ自体をも「相対化」していった。文学者たちは「非現実的な形象」を形而上的なものとして扱ったが、「SF（日本 SF）」は逆に、それらを卑俗な領域に引きずりおろした。そうであればこそ、怪獣対決路線の「特撮映画」やTVヒーロー番組を批判した「SF（日本

SF) 」も、核エネルギーの問題を主題として回復させる方向には「ジャンル」の想像力を働かせなかった。政治的・問題提起的なテーマ性を素直に是としないうところに、SFらしさが見出されたからである。

1960年代を通じて、「SF(日本SF)」は「相対化」の方法を先鋭化させていった。背景にあったのは、同時代におけるTVメディアの発展だった。

「SF(日本SF)」は、TVがもたらすわれわれの現実観や身体感覚の変容を、混乱と狂騒に満ちたドタバタとして描き出すことに傾斜していった。

もっとも、「SF(日本SF)」が称揚した「軽薄」なドタバタという「非政治性」は、現実は無批判に安住することと決して同義ではなかった。何をやってもドタバタになるしかない現代であれば、そこに乗かって「軽薄」さを自覚的に打ち出すことが、アクチュアリティの獲得に繋がる唯一の方法であるとの発想が、「SF(日本SF)」の根底にはあった。

しかし、後の世代においては「軽薄」の「政治性」は失われる。このことが、第六章の検討を通じて示される。「SF(日本SF)」ジャンルの影響下において、1970年代後半から1980年代初頭にかけて、1950年以降に生まれた年若い人びとによって、マンガやアニメなどのポピュラー・カルチャー領域を扱うファンダム活動が盛んになっていった。「特撮映画」も、この時期に、論じるに足る「ジャンル」として復活する。だが、それは、「特撮映画」を「原爆映画」や海外製のSF・モンスター映画、あるいは文学の領域などとは完全に切れた「ジャンル」として再編することと同義でもあった。

「ジャンル」の中心にあったのは、怪獣キャラクターおよび特撮映像へのフェティッシュな関心である。『ゴジラ』の反核テーマはあらためて評価の対象となったものの、それは怪獣ゴジラというフィクションキャラクターのありようと密接に結びつけて論じられていた。それゆえに、反核テーマの称揚は、1980年代末には、人びとの大量死や焼け野原、「放射能の恐怖」までも、ゴジラの魅力に回収されるものとして扱う姿勢に変化していき、核エネルギーの問題はキャラクター消費に吞まれていった。

このようにして、20～30年にも及ぶ時間をかけて、ポピュラー・カルチャーの「ジャンル」は、いかなる意味でも「非政治的」な領域となるに至った。作品や「非現実的な形象」のありようのみならず、それらを取り巻く批評や議論に至るまでが、「ジャンル」内に自閉し、「ジャンル」外の現実には立脚点を置かなくなったからである。

以上の考察を踏まえて、結論では、われわれはいかにしてポピュラー・カルチャーを論じていくべきなのかが述べられる。作り手と受け手、作品の三者を媒介しながら、「ジャンル」もまた社会に接触している。社会的なアジェンダを、作品や受け手にとって都合のよい形で内に導入するのも、「ジャンル」の特性なのである。そうである以上、作品やキャラクターを安直に社会と接続して論じるような研究・批評は、「ジャンル」の内部に導入されたとき、作品や

キャラクターに対する「非政治的」な価値づけに容易に姿を変えてしまうだろう。むしろ必要なのは、「ジャンル」そのものを開かれたものに変えていくような「ジャンル」批評の試みであるにちがいない。ここにおいて、1960年代の「SF（日本 SF）」が提起した、「軽薄」によるアクチュアリティの獲得という問題意識は、今なお決定的に重要な役割を果たしうるはずである。

(論文審査の結果の要旨)

マンガ・アニメを筆頭とする戦後日本のポピュラー・カルチャーに対する社会的関心が、1990年代後半以降、それらが世界中で高い人気を得ているらしいという、日本社会側からの発見とともに広まった。政府レベルでは、マンガ・アニメ作品などを顕彰する文化庁メディア芸術祭が1997年に始まり、さらに、アニメからコスプレまでを海外発信しようとするクール・ジャパン政策が展開されるようになった。学問分野においても、ポピュラー・カルチャーが現代日本社会の、なにかある面を反映しているはずだという想定のもとで、マンガ・アニメ作品、およびそれらを強度に消費するいわゆるオタク層に対する研究が盛んになってきた。2001年には日本マンガ学会が設立されるにおよんでいる。

このような研究上の風潮が強まるなかで、2011年3月11日に東京電力福島第一原子力発電所事故が発生した。この重大事故を契機に、肯定的イメージに彩られてきたマンガ・アニメヒーローの鉄腕アトムやドラえもんが、動力源としては原子炉を内蔵している設定になっていることがあらためて注目され、ポピュラー・カルチャー作品の研究にも新たな展開がみられるようになった。おもな対象は、ゴジラなど、核エネルギーによって生成されたとする「非現実的な形象」が登場する特撮映画であり、それらの分析を通じて、戦後日本の一般民衆が核エネルギーとどのように関わってきたのかを考察しようとする研究や評論が多数現れるにいたった。本博士論文は、こうした新しい潮流に棹さすものであるが、文字および映像の広範な一次資料の精緻な分析に基づく高度な学術性を担保している点で、他とおおきく一線を画している。

3・11後の研究や評論の多くは、人類は未来において核エネルギーに対してどのように対処するべきかという問題意識にとらわれるあまり、原発事故以降に顕著となった反核エネルギー的視点から過去の作品を意味づける傾向におちいりがちであった。しかもその場合、取り上げられるのは、自分の問題関心から意味づけしやすい作品や、読み手の関心を惹きつけやすい宮崎駿監督『風の谷のナウシカ』などの高名な作品にかぎられ、それも恣意的に一点ないし数点取りあげ、作品だけの分析と解釈に終始するものがほとんどであった。

本論文は、ゴジラ映画が初めて製作された1954年から福島原発事故前年の2010年までの長期にわたり、核エネルギーと関連づけられる「非現実的な形象」が登場する「特撮映画」を50作品、同じく「非現実的あるいは超現実的なプロット」をもつ「日本SF」10作品を取りあげ、それぞれについて作品発表当時の製作側の証言・作品解説本・評論・同人誌などさまざまなタイプの資料を蒐集し、それらを克明に分析して、作品の解釈や評価が

歴史的に変遷してきたことを検証する。たとえば、現在では反核映画として高い評価が確立している映画『ゴジラ』（1954年）が、たしかにビキニ水爆実験による第五福竜丸被爆事件に触発されて製作されたものであることを製作者側の資料を用いて実証するとともに、同時に公開当時の映画批評（荒正人ほか）では、反核映画としては高く評価されていなかったことを明らかにしている。さらに、核エネルギーを題材にした同時期の映画や文学作品に対する批評を参照しつつ、なぜ『ゴジラ』に高い評価が与えられなかったのか、その理由を1950年代日本人の反核意識の様相に求めている。3・11以前における戦後日本社会の核エネルギー観の変化（それは現実感の伴った恐怖の対象から、「核のファンタジー化」へと定式化できる）をポピュラー・カルチャーの分析を通じて検証しようとする試みは、ポピュラー・カルチャーの形成と変容を作品・作り手・消費者の三方向から、さらに歴史的視点から論じる本論文により、ようやく高い学術性を有するものとなったのである。

「核のファンタジー化」に関して、本論文は、1980年代末から顕著になったキャラクター消費という現象に、とりわけ注目する。怪獣の登場する特撮映画の子供向け娯楽作品化、アニメ作品や特撮技術を導入したTV番組の普及により、作品ではなく作品に登場する「非現実な形象」そのものがキャラクターとして消費されるようになるのである。オタク層によるこの消費形態については、それが社会性や政治性を忌避したところで展開されていることを指摘した先行研究がいくつかあるが、それらを踏まえた上で論者は、特撮とSFの専門雑誌や同人誌などでの発言を資料にしつつ、オタク第一世代（1950年代半ば～1960年代初頭生まれ）のあいだでは、ゴジラなど「非現実的な形象」がすでにキャラクター消費の対象とされつつあり、それ以前には恐怖の対象として描かれていた大量死をまねく放射線までもが、キャラクターの魅力にまつわるものとして歓迎されていたことを明らかにした。「核のファンタジー化」を象徴する現象として1980年代に定着するこの世代のゴジラ観を検証したことは、核エネルギー観の研究にとってのみならず、オタク研究にとっても重要な知見といえよう。

核エネルギーに対するオタク第一世代のこのような消費性向は、いったい何に起因するのだろうか。それを解明するために論者は、まず第一に、1960年代に形成が始まった「日本SF」の読者層（ファンダム）から1980年代にオタク第一世代が分化したことを、先述の特撮やSF専門誌の読者投稿文や同人誌の内容を分析して実証する。ついで論者は、超現実的なフィクションにこそ文学的アクチュアリティの可能性があるとした安部公房のアバンギャルド文学論から出発した「日本SF」が、星新一、小松左京、筒井康隆の活躍によりひとつのジャンルとして確立するにともない、しだいにその作品・作り手・読者が、政治的・問題提起的な姿勢を前面化しない「クール」

なフィクションジャンルとしてSFに価値付与していったことを緻密に論証する。核兵器や原発といった現実の核エネルギー問題に関与することを忌避しつつ核エネルギー関連の「非現実的な形象」を消費するという、オタク第一世代のこの性向を、論者は「日本SF」との系譜関係から解き明かしたのである。その立論は用意周到にして、かつテキストに即して展開されており、高い説得力をもっている。

論者は最後に、ポピュラー・カルチャーの作品・作り手・消費者の三者が核エネルギー問題に対する現実感をどのようにすれば獲得できるのか、という問題を考察する。これは、人文社会科学が社会と切り結ぶものであらうとするならば、避けて通れないアジェンダだろう。論者はまず、「日本SF」の作り手にはもともと「軽薄」さを自覚的に打ち出すことが現代社会への批判に繋がるという発想があったことを、小松左京や筒井康隆らの数多くの作品や評論を例示して指摘する。しかし、オタク第一世代はこうした発想を切り捨てながら「日本SF」の読者層から分化し、その消費対象として怪獣特撮映画・アニメというジャンルを新たにつくりあげたのである。それゆえ、核エネルギー問題の現実感を獲得するには、「日本SF」の作り手たちがもともと有していたこのような発想を再評価することが重要なのではないかと、論者は問いかける。

さまざまな問題を抱える現代社会を「軽薄」さを武器に揺さぶろうとする意識を「日本SF」の作り手が持っていた、という主張は、厳密なテキスト調査に基づくものであり、大いに首肯できる。また、日本SF論としてもこれまでにない指摘といえるかもしれない。ただし、こうした問題意識を共有することがリアリティーの獲得に繋がるという論者の主張が、評論的なレベルにとどまっていることは否めないだろう。

しかし、こうした問題点も、一次資料の渉猟によって多くの事実関係を明らかにした点、またそれに基づいて説得的な論をさまざまに展開している点、さらに今日的問題にも誠実に正面から応じようとした点など、本論文が有するすぐれた価値を、決して損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年4月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。